レ・ミゼラブル

ユゴー

佐藤 朔訳

新潮

レ・ミゼラブル I

ヴィクトール・ユゴー

佐藤朔訳

世界文學全集　6　新潮社版

世界文學全集 6

レ・ミゼラブル I

ヴィクトール・ユゴー

©佐藤 朔

1962年5月1日 印刷
1962年5月5日 発行
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町71
TEL(341)7111(代)
振替東京808

印刷所・凸版印刷株式会社
製本・大進堂製本所
本文用紙・王子製紙株式会社
函貼・カバー・扉見返・特種製紙株式会社
表紙布地・望月株式会社

定価 290円

〈落丁・乱丁本はお取り替えいたします〉〈Printed in Japan 1962〉

目次

第一部　ファンチーヌ

第一章　正しい人

1　ミリエル氏 …… 9
2　ミリエル氏がビヤンヴニュ閣下となる …… 12
3　よい司教に厄介な司教区 …… 17
4　ことばにふさわしい行為 …… 19
5　ビヤンヴニュ閣下が法衣を着古したこと …… 25
6　かれの家をだれに守らせたか …… 26
7　クラヴァット …… 34
8　酒のあとの哲学 …… 37
9　妹の語った兄 …… 41
10　未知の光明に面した司教 …… 45
11　一つの制限 …… 57
12　ビヤンヴニュ閣下の孤独 …… 61
13　かれが信じていたもの …… 64
14　かれが考えていたこと …… 68

第二章　転落

1　一日中歩き回った夜のこと …… 71
2　賢明な人に用心をすすめる …… 82
3　受け身の服従の雄々しさ …… 86
4　ポンタルリエのチーズ製造所についていろいろ …… 91
5　平静 …… 95
6　ジャン・ヴァルジャン …… 96
7　絶望のどん底 …… 102
8　波と闇 …… 109
9　新たな被害 …… 111
10　目をさました男 …… 112
11　かれがしたこと …… 115
12　司教ははたらく …… 118
13　プチ・ジェルヴェ …… 122

第三章　一八一七年に

1　一八一七年……131
2　二組の四重奏……136
3　四人と四人……141
4　トロミエス愉快になりスペインの歌をうたう……145
5　料理店ボンバルダ……147
6　うぬぼれの章……150
7　トロミエスの知恵……151
8　馬の死……157
9　歓楽のたのしい終わり……160

第四章　委託は譲渡となることがある

1　母と母の出あい……163
2　うさんくさい夫婦の手初めの素描……172
3　ひばり……174

第五章　堕　落

1　黒玉細工の進歩の話……177
2　マドレーヌ……179
3　ラフィット銀行への預金額……182
4　喪に服したマドレーヌ氏……185
5　地平のかすかな光……187
6　フォーシュルヴァンさん……193
7　フォーシュルヴァンがパリで庭番になる……196
8　ヴィクチュルニヤン夫人が道徳のために三十五フラン使う……197
9　ヴィクチュルニヤン夫人の成功……200
10　成功のつづき……203
11　「キリストはわれらを救い給う」……208
12　ママタボワ氏の無為徒食……209
13　市の警察のいくつかの問題の解決……211

第六章　ジャヴェール

1　休息のはじめ……221
2　どうしてジャンがシャンとなるか……225

第七章　シャンマチウ事件

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

1 修道女サンプリス……235
2 スコーフレール親方の眼力……238
3 頭のなかの嵐……243
4 睡眠中の苦悩の形いろいろ……262
5 故障……265
6 試練にたった修道女サンプリス……276
7 旅人は到着して、すぐに帰り支度をする……284
8 特別入場……288
9 有罪の決定がなされている場所……291
10 否認の方式……298
11 いよいよあっけにとられたシャンマチウ……305

第八章　反撃

1 マドレーヌ氏はどんな鏡で自分の髪をながめたか……310
2 幸福なファンチーヌ……313
3 満足したジャヴェール……317
4 官憲が権力をふたたびとりもどす……320
5 ふさわしい墓……325

第二部　コゼット

第一章　ワーテルロー

1 ニヴェルから来るときに見かけるもの……331
2 ウーゴモン……333
3 一八一五年六月十八日……339
4 A……342
5 戦争の「不明な点」……343
6 午後四時……346
7 上機嫌のナポレオン……349
8 皇帝は道案内のラコストにたずねる……355
9 意外なこと……357
10 モン・サン・ジャン高地……361
11 ナポレオンに悪い道案内、ビューローにはいい道案内……365
12 近衛兵……367
13 破局……368

14 最後の方陣 …… 371
15 カンブローヌ …… 372
16 指揮官の価値はどれくらいか？ …… 374
17 ワーテルローをみとめるべきか？ …… 379
18 神権説の再発 …… 381
19 夜の戦場 …… 383

第二章　軍艦オリオン号

1 二四六〇一号が九四三〇号となる …… 390
2 悪魔のものらしい二行の詩句が読まれる場所 …… 392
3 足輪の鎖が金槌の一撃でこわれてしまったのには、準備工作が必要であったということ …… 397

第三章　死んだ女への約束をはたす

1 モンフェルメイユの飲み水の問題 …… 404
2 ふたりの肖像の仕上げ …… 408
3 人には酒がいるし、馬には水がいる …… 413
4 人形の登場 …… 416
5 小娘ただひとり …… 417
6 ブーラトリュエルの利口を証明するらしいもの …… 423
7 コゼットが闇のなかで知らない男と並んで歩く …… 428
8 金持ちだか貧乏人だかわからない男を泊める不愉快さ …… 431
9 テナルディエの策略 …… 149
10 最善を求めて最悪を手にいれることもある …… 458
11 九四三〇号がふたたびあらわれ、コゼットは当たりの番号を引く …… 463

第四章　ゴルボー屋敷

1 ゴルボー先生 …… 464
2 ふくろうとうぐいすの巣 …… 470
3 ふたりの不仕合わせな人間がいっしょになって幸福になる …… 472
4 代表借家人の老婆の観察 …… 476
5 五フラン貨が床に落ちて音をたてる …… 478

第五章　暗闇の追跡に無言の同勢

1　計略のジグザグ……482
2　オーステルリッツ橋に車が通るのはありがたい……485
3　一七二七年のパリの地図を見よ……487
4　盲滅法の逃走……490
5　ガス灯がついていたらできなかったろう……492
6　謎のはじまり……496
7　謎のつづき……498
8　謎は深まる……500
9　鈴をつけた男……502
10　ジャヴェールがえものを見つけそこなったのはどういうわけか……506
ヴィクトール・ユゴー……517

Les Misérables

by

Victor Hugo

レ・ミゼラブル

（I）

法律と風習があるために、社会的処罰が存在し、文明のただなかに人工的な地獄をつくりだし、神意による宿命を人間の不運でもつれさせているかぎり、また貧乏のための男の失墜、飢えのための女の堕落、暗黒のためのこどもの萎縮という、現世紀の三つの問題が解決されないかぎり、またあちこちで社会的窒息が起こりそうであるかぎり、ことばをかえて、もっと広い見地に立って言えば、地上に無知と悲惨がある以上、本書のような性質の本も無益ではあるまい。

一八六二年一月一日　　オートヴィル・ハウスにて

ヴィクトール・ユゴー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第一部　ファンチーヌ

第一章　正しい人

1　ミリエル氏

一八一五年のこと、シャルル・フランソワ・ビヤンヴニュ・ミリエル氏は、ディーニュの司教だった。七十五歳ぐらいの老人で、一八〇六年以来ディーニュの司教職にあった。

こうしたこまかいことは、これから述べる物語の内容そのものには少しも関係はないが、この司教区に着いたころのかれに関する噂や話をこの際述べることは、なにごとも正確にというためだけであっても、おそらくむだではあるまい。真偽はともかく人の噂は、その人の生涯に、ことにその運命にとって、その人のおこなうことと同じくらい重要な位置を占めていることが多い。ミリエル氏はエクスの高等法院の評議員の息子で、身分の高い法官の家柄である。父は、自分の職をつがせるつもりで、高等法院の家柄ではかなりひろまっていた習慣によって、かれをごく若いうちに、十八歳か二十歳で、結婚させた、という噂だった。シャルル・ミリエルは、こうして結婚したあとでも、いろんな浮いた話がつきなかったという噂であった。かなり小柄だったが、粋で、上品で、才気があり、風采がよかった。生涯のはじめは、社交と色ごとに埋もれていた。大革命となって、事件がやつぎばやに起こり、高等法院の家族たちは殺され、追われ、追いつめられ、四散した。シャルル・ミリエル氏は、大革命のはじまったころから、イタリアに亡命した。その妻はそこで持病の胸の病で死んだ。ふたりにはこどもがな

かった。その後ミリエル氏の運命はどうなったか？
フランスの旧社会の崩壊、かれ自身の家庭の没落、一七九三年の悲劇的な光景、ただただ恐怖心をつのらせて遠方からながめていた亡命者たちにはいっそう恐ろしく思えたにちがいない光景、こうしたことが、世を捨て、孤独に暮らす考えを、かれの心に芽ばえさせたのであろうか？　世間の大変動のために生活や財産をめちゃめちゃにされてもびくともしなかった人も、ときにはショックを受けて、気も転倒するような神秘な恐ろしい打撃に、かれはこれまでその生活をしめていた気ばらしと愛欲のさなかに、不意打ちをくらったのであろうか？　それはだれにもわからない。わかっていたことは、イタリアから帰ってきたとき、司祭になっていたということである。
一八〇四年には、ミリエル氏はB（ブリニョル）の司祭だった。もう年寄りで、まったく引きこもって暮らしていた。
ナポレオン皇帝の戴冠式のころ、いまではもうなんだったかわからないが、司祭としてのちょっとした用向きで、かれはパリにでかけた。多くの有力者のなかでも、フェッシュ枢機卿のところへ行って、教区民のために請願した。皇帝が叔父にあたるこの枢機卿を訪ねてきた日のこと、この堂々たる司祭は控え室で待っていた。そこへちょうど皇帝が通りかかった。ナポレオンはこの老人が自分を物珍しそうに見つめているのに気がついて、振り返って、いきなり言った。
「わたしを見つめているあの年寄りは何者か？」
「陛下」とミリエル氏は言った、「あなたはひとりの年寄りをごらんになり、わたしはひとりの偉人に拝顔しているわけです。お互いに為になりますことでしょう」
皇帝はその晩、枢機卿にこの司祭の名前をきいた。その後まもなくミリエル氏は自分がディーニュの司教に任命されたことを知って、すっかり驚いてしまった。
それにミリエル氏の前半生のことで伝えられている話のうちで、どれだけがほんとうだったろうか？　だれも知らなかった。大革命前のミリエル家を知っている家庭は、ないといってよかった。
ミリエル氏は、小さな町に新しくやってきた者が受ける運命に見舞われないわけにはいかなかった。おしゃべりは大勢いるが、ものを考える者はほとんどいないといった土地だった。かれは司教だったが、いや司

教だったからこそ、こうした運命をしのばねばならなかった。だが、要するに、かれの名が引き合いにだされる話は、おそらく単なる話にすぎなかった。噂であり、ことばであり、おしゃべりであった。おしゃべりというより、南フランスのどぎつい方言でいう「むだ話」であった。

それはともかく、ディーニュで司教を九年も勤めあげると、はじめのころ小さな町や下層階級の人たちが夢中になって話の種にした噂話も、あとかたなく忘れられてしまった。それを話したり、思い出したりする者さえいなかっただろう。

ミリエル氏がディーニュにきたとき、オールドミスのバチスチーヌ嬢をつれていたが、これは妹で、十歳年下だった。

この兄妹の召し使いとしてバチスチーヌ嬢と同年の女中がいるだけで、マグロワール夫人と呼ばれ、「司祭どのの女中」というわけだったが、いまでは老嬢の小間使いと司教閣下の家政婦という二重の肩書きをもっていた。

バチスチーヌ嬢は、背が高く、顔色は青く、やせて、おとなしいひとだった。「尊敬すべき」ということばがあらわしている理想そのままの女だった。女が尊敬されるには、母親らしくなければならないらしいからだ。彼女が美しかったことは一度もない。神さまに仕える仕事ばかりしてきたその生涯は、いつか彼女に一種の清浄と明るさを与えるようになっていた。そして年をとるにつれて、善意の美しさとでもいうようなものが備わっていた。若いころやせていた体は、成熟して透きとおるみたいだった。この透明さは天使を見る思いをさせた。処女というよりはむしろ魂であった。体が影でできているみたいで、性別がつくだけの肉づきはまるでなく、光をふくんだわずかな物体みたいであった。大きな目をいつも伏せていて、魂が地上にとどまるための口実といった風情だった。

マグロワール夫人は、小柄で、色白で、脂肪質の、ふとった、せかせかしている老婆で、いつも息切れしていたが、これはよくはたらくせいでもあり、ぜんそくもちのためでもあった。

着任の日に、ミリエル氏は、司教の地位は旅団長につぐという勅令で定められた儀式で、司教館に迎え入れられた。市長と市会議長が最初に挨拶にきたが、かれのほうも将軍と知事を最初に訪問した。

着任がすむと、市は司教が仕事をはじめるのを待った。

2　ミリエル氏がビヤンヴニュ閣下となる

ディーニュの司教館は慈善病院のとなりにあった。司教館は石造りの広い美しいやかたで、十八世紀のはじめにアンリ・ピュジェ司教閣下が建てたものだった。この人はパリ大学の神学博士で、シモールの修道院長であり、一七一二年にディーニュの司教になった。このやかたはまことに閣下にふさわしい邸宅であった。すべて堂々たるふうで、司教の居間、客間、小部屋、フィレンツェの古い様式どおりにアーケードつきの歩廊のある、とても広い中庭、大きな樹木のそびえた庭園などがあった。一階の庭園に面した長い、りっぱな回廊式食堂へ、アンリ・ピュジェ司教閣下が、一七一四年七月二十九日に、つぎのような人たちを正餐に招いたことがある。それは大司教でアンブロン公のシャルル・ブリュラール・ド・ジャンリス閣下、カプチン修道会士でグラースの大司教アントワーヌ・ド・メグリニー閣下、フランス修道院会長でサン・トノレ・ド・レランの修道院長フィリップ・ド・ヴァンドーム閣下、ヴァンスの司教フランソワ・ド・ベルトン・ド・クリヨン男爵、グランデーヴの領主で司教のセザール・ド・サブラン・ド・フォルカルキエ閣下、そしてスネーズの領主で司教で、オラトリオ会の司祭で、国王の説教師でもあるジャン・ソアナン閣下などであった。以上の七人の司教たちの肖像画が食堂にかかげられ、その記念日である「一七一四年七月二十九日」の日付が、白大理石の板の上に、金文字できざみこまれていた。

慈善病院のほうは、小さな庭つきの二階建の、せまくて低い建物だった。

司教は着任後三日目に、病院を見回った。見回りがすむと、院長に自宅へきて欲しいとたのんだ。

「院長さん」とかれは言った。「いま、病人は何人いますか？」

「二十六人です、閣下」

「わたしが数えたとおりですね」と司教が言った。

「ベッドが」と院長は語をついだ。「くっつきすぎていまして」

「それも気づきましたよ」
「病室は小部屋ばかりで、風通しがよくありません」
「そのようですね」
「それに、日が当たっていても、回復者が散歩するのにはせますぎまして」
「そう思いましたよ」
「今年はチフス、二年前には軍隊熱がはやりましてね、そんなときは患者の数が百人にもなって、なんとも処置なしです」
「わたしも同じことを考えましたよ」
「どうにもなりません、閣下」と院長が言った。「あきらめなくては」
　この会話は一階の回廊式食堂でおこなわれた。司教はしばらく黙っていたが、それからふいに院長のほうをふりむいた。
「院長さん」とかれが言った。「この食堂だけで、ベッドがいくつはいると思いますか？」
「閣下の食堂にですか？」と院長はびっくりして叫んだ。
　司教は、食堂を見回して目の子算で数えているようだった。
「二十ははいるな？」とひとりごとのように言ってから、声を高くして「ねえ、院長さん、申しあげますがね、あきらかにまちがっていますよ。あなたたちは五つか六つの小部屋に、二十六人もはいっている。わたしたちのほうは三人で、六十人分の場所がある。まちがっていますよ、たしかに。あなたがわたしの家に住み、わたしがむこうにはいります。わたしの家を明けわたしてください。ここはあなたの家です」
　あくる日、二十六人の貧しい人たちが司教館にはいり、司教は病院に移った。
　ミリエル氏は、その一家が大革命で破産したので、財産がなかった。妹には五百フランの終身年金があり司教館に暮らして、それだけあれば自分だけの費用にはことかかない。ミリエル氏は司教として、国家から一万五千フランの俸給をもらっていた。病院の建物に住むようになったその日に、ミリエル氏は、この金額の用途を断然、つぎのようにきめた。かれの手で書かれたメモをここに写しておこう。

　わが家の支出をきめるためのメモ
　小神学校のために……一五〇〇リーヴル（訳注　フランと同じ）

修　道　会……一〇〇リーヴル
モンディディエのラザリスト修道
会士のために……一〇〇リーヴル
パリ外国宣教会神学校……二〇〇リーヴル
聖霊修道会……一五〇リーヴル
聖地の宗教施設……一〇〇リーヴル
聖母慈善協会のために……三〇〇リーヴル
さらに、アルルの同協会のために……五〇リーヴル
刑務所改善事業……四〇〇リーヴル
囚人の慰問と救済事業……五〇〇リーヴル
借金のために刑務所入りしている戸
主たる父親の釈放のために……一〇〇〇リーヴル
司教区の貧しい教師の給料補助…二〇〇〇リーヴル
オート・ザルプ地方の穀物貯蔵所…一〇〇リーヴル
貧しい女子の無料教育のためのデ
ィーニュ、マノスク、シストロン
の婦人修道会……一五〇〇リーヴル
貧しい人々のために……六〇〇〇リーヴル
個人的費用……一〇〇〇リーヴル
計……一五〇〇〇リーヴル

ディーニュの司教職についていたあいだ中、ミリエル氏はこの計画にはほとんど変更を加えなかった。前述のように、かれはこれで「わが家の支出をきめた」と言っていたのである。

この計画を、バチスチーヌ嬢は絶対服従で受け入れた。この聖女にとって、ディーニュの司教どのは兄であると同時に、彼女の司教であり、性質からみて親友であり、教会からみれば目上であった。彼女はかれを愛し、頭から尊敬していた。かれが話をするときは黙ってうなずき、かれが行動するときは協力した。女中のマグロワール夫人だけは、少しぶつぶつ言っていた。前述のとおり、司教は私用に千リーヴルしかとっておかなかったので、バチスチーヌ嬢の年金をたしても、年に千五百リーヴルにしかならない。この千五百リーヴルで、ふたりの老婦人とこの老人が生活していたのである。

それでも、村の司祭がディーニュにきたときなどは、マグロワール夫人のきりつめた節約と、バチスチーヌ嬢の頭をはたらかしたやりくりのおかげで、司教は客をもてなすことができた。

ある日、――ディーニュへきて三カ月ほどたってか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton